

## 『「全点一挙公開 国宝 源氏物語絵巻」を観る旅』に参加して

となみ芸術文化友の会会員 谷口 美都江

「徳川美術館で国宝源氏物語絵巻が展示されるので行きませんか。」と小西前美術館長にお誘いいただき、「是非行きたいです。昭和六十二年に見てそれ以来です。」私は久しぶりに自分の目が輝くを感じて、早速会員になり参加させていただきました。

最初に幸兵衛齋を訪れました。幻の名陶ラスター彩を復元した人間国宝六代目加藤卓男氏の作品の他に、古くペルシア、中国、朝鮮などの作品も展示され、どの作品にも宇宙があり蓄積された時間の重みに圧倒されつつも、物古りた時空の中でその重さに静かに沈んでいく自分が心地よかったです。そして館内に流れていたバッハの管弦楽組曲。

昼食はひらのやさんで大名御膳という立派なお食事をいただきました。ここに前の前の館長の石丸名都美術館館長がお越しくさいました。

石丸館長のご案内で名都美術館に行き、伊東深水の美人画を堪能しました。清澄で豊かな色彩の中に、女性たちの細やかな情感と心意気が美しさとなって描かれ、余白からも時代の空気感が醸し出されていて、懐かしい幸福感にしばし浸っておりました。

次に訪れたメナード美術館には、化粧品会社の創業者夫妻が中心となって収集した、世界に冠たる作家の名作が勢揃いしていました。「これが藤田嗣治が裸婦像に用いた乳白色、何て魅力的。」私はここで初めてその乳白色を見ることができました。

小雨はいつしか本降りとなり、やがて木曾川のほとりに出て犬山ホテルに到着しました。同行された川端さんの案内で、ホテルに隣接する有楽苑の国宝茶室の如庵などを見学しました。夕食は歓談とご白慢の歌やお話の中、ホテルならではの会席料理をいただきました。

翌日の徳川美術館。国宝源氏物語絵巻の徳川美術館所蔵の十五場面と、五島美術館所蔵の四場面が一挙に公開され、さらにそれぞれの復元模写も展示されるという夢のような企画でした。約九百年前に作られた国宝絵巻からは、制作に携わった人々の源氏物語の深い解釈がその構図などから窺われ、また色彩は剥落しつつも今なお絵巻白らが進化成長している過程が感じられました。さらに現代科学と表現技法を駆使した復元模写によって当時の色彩が蘇り、新旧の絵巻を同時に見る幸運を得ましたが、復元模写に携わった林功さんが志半ばで帰らぬ人となる悲話があり、二重三重に感慨深いです。

昼食はガーデンレストラン徳川園で、美しい庭園を眺めながら豪華なランチをいただきました。

最後に訪れた三岸節子記念美術館では、力強いタッチと色彩に、彼女の生きることと描くことの強い情念を感じ、たいそう勇気づけられました。同時開催の上田麦僊をめぐる画家たちの美しい日本画も印象深かったです。

名作に触れてどこも立ち去りがたく、また皆様との語らいを通じて、晩秋さながらでありました私は元気をいただきました。ありがとうございました。



名鉄犬山ホテルにて  
平成27年11月17日～18日

# オリジナルミュージカル「オーライ!」を公演します

砺波市文化会館 館長 小幡 豊

砺波市文化会館は、「となみミュージカルキッズ」が発足した平成17年4月以来、その支援母体である「同応援する会」の皆さんと協働して、ミュージカルの公演を行ってきました。そして、本年結成10周年を迎えたことを記念し、平成27年8月に、これまでの活動の集大成として、またさらなる飛躍の新たな出発点とするため、東京の豊島公会堂でオリジナルミュージカル「KAGUYA」を公演しました。東京公演では、ほぼ満席の400名近い皆さんに観に来ていただき、そのクオリティの高さに驚きと大きな拍手をいただき、高く評価していただきました。「砺波」で育まれた子供たちの溢れる個性とひたむきさ、一生懸命さ、それを地域の人が支える「砺波の地域力・文化力」を強くアピールできたと喜んでいます。



東京公演の1シーン

東京公演後、何人かのメンバーが卒業し、入れ替わりに数人の子供たちが新たに入会してきました。平成28年3月5日(土)、6日(日)の両日、砺波市文化会館大ホールにおいて開催される新作オリジナルミュージカル「オーライ!」の公演に向けて、稽古も本格的になり、スタッフ・キャストが丸となって頑張っています。



「オーライ!」練習風景

今回のミュージカルは、過疎化していく海辺の小さな町の「風の丘分校」を舞台にしたお話です。今秋に行うはずだった学校祭が中止となり、大好きだった先生も学校を辞めると知った子供たちが、大人の都合で勝手に決められていくことに反発して教室に閉じこもり、先生が一生懸命子供たちを説得する子供たちと先生との心温まる物語です。

これまでの10年の活動、そしてこの夏の東京公演の経験を踏まえ、地元の人たちが創作、指導、舞台製作し、子供たちが一生懸命ひたむきに演じ、歌い、踊る《砺波発オリジナルミュージカル》は、皆さんにきっと深い感動と元気を与えてくれると思います。となみ芸術文化友の会の皆様には、是非この機会にご覧いただければと存じます。

ご来場を心からお待ち申し上げます。

## 「至高の精神展 17 「心えがく光」 高島圭史」について

砺波市美術館 学芸員 杉本 積

至高の精神展 IN SPIRITU ALTISSIMO は、多様な展開を見せる現代美術の分野で活躍している作家を紹介する展覧会です。第17回目となる今回は、平成28年1月30日(上)から2月28日(日)の会期で、「心えがく光」と題して高岡市在住の日本画家 高島圭史(たかしま けいし)さんの近作を中心に新作を加えて紹介します。(観覧無料)



「まどろみ」 2015年 91×116.7cm

院展において日本美術院賞(大観賞)、天心記念茨城賞を受賞し、特待に推挙され一躍注目を集めました。2014年からは准教授として後進の指導にも力を注いでいます。高島さんの創作は、古代錦で彩色された光り輝く優美な女性像を追求している「きいろいひと」の連作と自身の周辺から美しい事象の断片を拾い上げて想像力豊かに画面に織り込んだ作品の二本柱で制作を行い表現の可能性を拡げています。彼の静謐で繊細な作風は、見る人を追憶の旅へと誘います。

12月の初旬に私は、至高の精神展開準備のため富山大学芸術文化学部高岡キャンパスに高島さんを訪ねました。そこは、磨りガラスの大きな窓から柔らかく外光が差し込むアトリエを兼ねた研究室でした。机や床の絵皿には色とりどりの岩絵具がすぐ使えるように準備され、壁にはデッサン、下絵、制作中の木画が立てかけてあり、ここで、繊細で美しい作品が生み出されることが実感できました。高島さんは、市民ギャラリーの図面に出品予定の作品を絞り込み展示計画を練っていました。その様子に展覧会に対する強い思いと意欲が感じられ1時間半の打ち合わせがあっという間に終わりました。この高島さんの展覧会に賭ける情熱が少しでも鑑賞する方々に伝わるような展示になればと思います。

高島さんは、1976年兵庫県西宮市に生まれます。日本画家であった祖父の影響もあり幼少期から絵画に親しみながら過ごします。1997年に東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻に入学し作品制作に励みます。2001年には、再興第86回院展に出品初人選し以降は院展を中心に発表を行います。また、創作活動と並行して大学院博士課程の在学中には、「国宝 源氏物語絵巻」現状模写制作をとおして平安時代の絵画研究を行いました。

2009年に富山大学芸術文化学部にて専任講師として着任し高岡市に居を移します。大学で教鞭を執りながら制作活動に邁進し2012年の再興第97回



富山大学芸術文化学部高岡キャンパス高島研究室

## 岩合光昭写真展「ねこ」開催報告

世界中を駆け回る動物写真家・岩合光昭氏が40年以上にわたって撮影した「ねこ」の作品204点を、9月5日(土)から10月12日(月)の36日間展示いたしました。会期中には16,560名もの観覧者をお迎えし、好評のうちに幕を閉じました。また、9月26日(土)には岩合光昭さんをお招きし、アーティスト・トーク&サイン会を開催したところ、企画展示室に入りきれないほどの観覧者で賑わいました。岩合さんは猫の自然な表情を撮影する方法について、「子猫の写真を撮るときには母猫の許可を得ている」などとユーモアたっぷりに話し、会場を沸かせていました。



岩合光昭 アーティストトーク&サイン会 会場風景

あしひかり  
カウ  
岩合光昭さんのトークショーが  
行われ、たくさんのお観覧者  
が参加していただきました。  
トークショーでは、猫との  
対話を通じて、時間をかけて  
生み出す作品についての説明  
や、撮影時の注意点などの話  
が聞けました。岩合さんの  
言葉が、会場を沸かして  
くれました。ありがとうございました。  
作品の中には猫の顔が  
写り込んでいたものもあり、  
猫の顔を写すのは、猫の  
許可を得てから撮影する  
必要があります。猫の顔を  
写すのは、猫の許可を得  
てから撮影する必要があります。  
(高岡市・本江行隆氏)

平成27年10月6日(火)付  
読売新聞富山版 紙面より  
(とらみ芸術文化友の会会員  
本江行隆さんの投稿)

## 館蔵品展「版画の誘惑」

会 期：2016年1月9日(土)～1月31日(日)  
午前10時～午後6時

※1月18日(月)は、施設点検日のため休館いたします。

会 場：砺波市美術館1階 企画展示室 観覧無料

当館の版画コレクションを展示します。

**出品作家** 仲村進、平山郁夫、熊谷守一、池田満寿夫、中谷泰、  
伊藤清永、斎藤三郎、三尾公三、芝田米三、前田常作 ほか

**関連催し** ギャラリートーク

2016年1月23日(土)、30日(土)各回午後2時より展示会場にて



北川純次 (Dear Mother) 1976 エッチング

## 編集後記

女優の小泉今日子が読売新聞に掲載していた書評十年分がまとめられ、「小泉今日子書評集」として出版された。「その本を読みたくなるような書評を目指して十年間、たくさんの本に出会った。読み返すとその時々のお悩みや不安や関心を露呈してしまっているようで少し恥ずかしい。でも、生きることは恥ずかしいことなのだ。私は今日も元気に生きている」さあ、皆さん来年もお元気で。(O)

冬晴れのとある駅より印度人

飯田龍太